

| | |
|-----|--|
| 委員 | <p>おり、本協議会の成立要件は満たしていることをご報告申し上げます。</p> <p>それでは、お手元の議事に従いまして会を進めてまいります。本日の議題は、「協働的な学び」とICT等の利用～各機関でのICT等の活用状況と成果と課題～についてです。まずは、事務局の方からお願いいたします。</p> |
| 事務局 | <p>事前にお送りしておりました資料をご覧ください。第1回目の協議会のまとめには、「個別最適な学び」とICT等の利用について、それぞれの立場からいただいたご意見をまとめております。そして、最後にアドバイザーの先生方からご指導いただいた内容の中から、今回の「協働的な学び」とICT等の利用につながる視点をまとめております。それぞれの立場から普段考えていることや工夫されていること、困ったことや疑問点等について協議できればと思っております。</p> <p>協議の前に、「協働的な学び」について、前回アドバイザーの方からいただいたご意見を読ませていただきたいと思います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・できる子、できない子の格差がすごく大きい。上手にしているところは友達同士で教え合いをしている。どうしたらいいか困っている子がいたら、周りの子が「こうするんだよ」と教えてあげれば済む。分からなかったら、「これどうするか教えて」と言えば、周りの子が助けてくれる。気軽に助け合う周りの子どもの福祉教育、人権教育というのがあって、集団の中でそういう学級経営をしているクラスでは、子ども同士が上手に助け合いしながらやっている。 ・自分が扱うことができないと自分のタブレットはそのままにして、隣の子のタブレットと一緒に見ながらしゃべりながら学習をする、それもいい。 ・絵本の読みきかせと同じように、友達と共有し、一緒に話し合いながら勉強していけばよい。 ・自分だけでは得られない情報をインターネットやいろいろなところから調べ、お互い調べたものを比べてみてどちらが分かりやすいかを話し合いをしながら学習する。 <p>等のご意見がありました。</p> |
| 委員 | <p>ありがとうございます。ICTの活用は日常の中の特別なことではなくなってきた時代であり、そういう毎日を過ごされているかと思えます。それぞれ関わられている立場からこのICTについて良い点や、現在困っており向き合っている点等を教えていただきたいと思います。</p> |

| | |
|----|--|
| 委員 | <p>東予・子ども女性支援センターです。児童相談所からの積極的な提案というのは難しいところがありますが、一時保護中の児童については児童相談所内で学習もしていますので、ICTを活用して遠隔で授業に参加するといったことができるのととても有効的だと児童相談所内でも話が上がりました。対応する職員の端末利用の知識や、一定のルールや環境づくりが必要だと思っておりますが、そういったICTの活用ができればいいと考えています。</p> |
| 委員 | <p>保健センターです。私は母子保健係に所属しており、対象が未就学児さんが多いため、ICTを活用した学習については業務の中ではあまり関わりがないところではありますが、ICT関連としては保護者の方、特にお母さんがインターネットを活用し、育児書代わりにいろいろ調べている方が多く、その中でもSNSで都会の方が発信している情報を見て、その情報に振り回され、悩んでいる方も多いです。そういったICTの利活用という点では、保護者の方にも使い方のご助言ができればいいと思っています。</p> |
| 委員 | <p>地域福祉課です。地域福祉課としてそれぞれのサービスを提供する事業所にICT等の研修があることをご紹介しますが、それぞれの事業所がどこまでそのICTを活用しているのか、どんな風に運用しているかというのは把握できていないところもあるので、そういったところを把握していけたらいいと考えております。</p> |
| 委員 | <p>肢体不自由児者父母の会です。肢体不自由児の中で、特性として姿勢や動作の不自由がもたらす困難さや、感覚や認知の困難さがあったり、経験や体験の少なさからくるいろいろな困難さがあるため、一律に全員がタブレットを使ってできることは少ないと思います。今回ここに来るにあたり、川西分校のホームページを見ました。8月中旬に5回にわたってICTの活用レベルアップ研修というものをされていて、そういう研修の中から実際に、現場実習の報告会をスライドを使って発表し、写真を他の生徒がよく見て話を聞いていたり、ALTの訪問授業に向けて、自己紹介のための名刺作成をタブレット端末を使用して作ったということがありました。ただタブレットを渡されても、いろいろな機器が必要だったり、いろいろな支援が必要な子どもたちなので、まずは本人に合わせた使い方ができるかということを中心に、その後に協働的な学びとしては、先程申し上げたスライドを使用しみんなで見るという風に使えるのかなと思います。一人一人がスペシャルニーズの人が多いため、そこに対応してくださっているということを考えると現場の先生はとても大変ですが、いろいろなサポートを受けられる今、研修や教育センター等いろいろなところからの派</p> |

| | |
|----|--|
| 委員 | <p>遣があるので、学校現場も大変だと思いますが、活用していただいて、少しずつ前向きにイケたらいいと思っています。</p> <p>児童発達支援事業所はげみ園です。未就学児の施設なのでICTを活用についてはあまり当てはまる状況ではないと思っております。はげみ園に来ている利用者さんで、教室利用が困難な方には、写真や絵のカードを使ってコミュニケーションを取るという方法を取っています。それについてはとても有効なもので、子どもたちにとっても便利なものだと思ってもらえているという実感はすごくあります。これは考えようによっては、ICTのアナログ版という風にも思っています。能動的に参加できる方法が、このICTによって子どもたちがこれならできると自信を持って参加できることが広がっていくといいと思います。</p> |
| 委員 | <p>まさき育成園です。私どもは相談業務が主です。その他、新居浜市の障がい者虐待防止センターをお受けしております。このところ障がい者の方のお母様方の相談が多いです。その中で感じることは、タブレットやパソコン類をご家庭で機嫌良く使っているときは、暴力もなく、好きなことをして遊んでいます、その中のメニューの選び方に問題があり、残忍なゲームであったり、残忍な場面であったり、好んでそればかりを見ているお子さんは、中学校や高校になると他害行為が多くなったり問題を起こしたりするお子さんが多いと思います。社会で承認されているマイクラフト的なことを熱心にされるお子さんは良いとして、残忍な画面や動画は見ない方がいいということや時間や親子でのルールをきちんと設定した方が良いことをお母様方にやんわりと今まで何度も伝えてきました。しかし、「うちの子はこれを見てると落ち着いてるから」とか、「安定しているから」というような言葉を使って野放しにされてきています。たまたま奇しくも今日、病院から電話があり、その中の一人の方が病院に駆け込んだようで、親御さんに暴力を振るっており、入院させてもらえないだろうかといったご相談があったみたいです。病院からも電話があって「相談支援で何か方法はありますか」「その方をどこかの施設やグループホームに収容できるような手立てはありませんか」というような話が主でしたが、急にそういった対応は難しく、近々支援会議を行うことにしました。個人的には野放しにしたまま、ルールもない、そういう指導もない中で、ご家庭の中で自由に使って自分だけの世界に浸っているということではなく、どこかで幼少期の時に正しいタブレットの使い方やパソコンの使い方を教えないと、ご家庭に任せるのは少し無理ではないかなと感じます。先程申し上げたように、大人しくしていたら安定しているという捉え方の保護者には、そうではなくて、もう少し</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>正しい使い方やルールをもっと幼少期の時に教えるという指導をしないと、小学校の高学年や中学校になって自由な生活が固まってしまい、難しい大きな問題になってくるのではないかと考えております。何度も申し上げているように、幼少期の時にそういう風なご家庭への指導を、学校できちんと教えたり、指導する機関等のシステムがあると良いと思っています。</p> |
| 委員 | <p>子ども部会です。最近では赤ちゃんの時から YouTube を見たり、いろいろなアプリを使って知育的な面に取り組んだり、家の中でも知らず知らずに ICT を使って遊んでいるということが多いと思います。やはり幼児期にコミュニケーションを教えるということは、主にコミュニケーションの楽しさだったり、人と関わることが楽しいこと、便利なことを伝えていく時期だと思っています。そのツールとしてタブレットやスマートフォンを使用するということがいいのですが、「静かにしているから」「ずっと見ているから」という理由でお守りのような使い方をし、依存的になってしまっている小さいお子さんの相談が時々あります。放課後等デイサービスが市内にもたくさんありまして、そちらでも先程話題に出ていました e スポーツだったり、パソコンを使って学習を進めたり、様々なトレーニングを行ったりと、全国的な取り組みをしている事業者さんもたくさんあります。そこでも、あらかじめソーシャルスキルトレーニングのような形で好ましい使い方、どうなったら終わりますとか、何分したら交代しますとか、そういうことをある程度指導をしてから使うと、事業者さんの中では比較的トラブルが少ないということをお聞きします。ただ、家では使い方がどうしてもゲームになってしまい、自分一人の力で適切な時間で切り上げることが難しく、イライラしてしまったり、きょうだい喧嘩に発展したり等、活用して学習をしているというよりも、余暇のところで困っているということをよく伺います。以上です。</p> |
| 委員 | <p>就業生活支援センターエールです。私は、障がい者雇用、一般企業に向けての就労支援や相談を受けている事業者です。今までは対面の相談が多かったと思いますが、ICTという言葉自体は、コロナウイルス感染が始まってから耳にするようになりました。感染が気になり、持病があつてなかなか対面で実施するのが怖いという方に関しては、機器を持っているならば、タブレットを使った相談方法もありますし、最近であれば面接なども本社が東京など遠隔の場合、そういうものを通じて面接をすることも多々見受けられるようになりました。研修についても、遠いところまで行かなければ専門的なお話を聞けませんが、聞きたいと思ったら、ICTを使って気軽に情報を取り込むことができたり、勉強したりする機会が設けられるようになったことはとても良いこ</p> |

とだと思えます。また、面接の練習、ビジネスマナーの研修会等で、ハイブリッドのような形で、会場に来て体感しないと分かりにくいという方に関しては会場に来ていただき、人と会うことが苦手、感染が気になるという方に関しては、オンラインを使っただけの研修会等も実施するような形になったので、そういった意味では幅広く活用ができるようになったと思っております。少し話がずれるかもしれませんが、私は中学生の娘がいるんですけども、タブレットの導入についていろいろと計画立てて進めていたと思っておりますが、学習の中で急にタブレットを使うことになり、なかなか保護者に対する説明が少ないと感じます。最初にどういう風に導入して何を目的でタブレットを使っていくかというところは正直、情報として少なかったと思えます。プログラムは使っているけれども、それ以外ではあまり活用していないところも見受けられるので、そういったところも保護者等に説明をしていただくといいと思っております。

委員

新居浜ローズです。協働的な学び、一人ではできない活動ということで、新居浜ローズからは昨年度から導入したLINEグループでの事例を含めて、3つ紹介させていただきたいと思えます。1つ目は緘黙のある子で、面と向かっては話しかけても無言が多く、長年一緒に活動していても、メンバー同士で会話する姿はほとんど見たことがありません。現在もキーパーソンとなる人と会話がほとんどという感じです。しかし、LINEグループを始めたことで、実は他人に無関心なのではなくて、メッセージが届くと誰よりも早く反応してメッセージを返信することができるということが分かりました。困っている人へのメッセージに対しては、共感も含めて、普段こんなに優しい言葉を使っているんだと、毎回嬉しい発見をしています。顔を合わせないことで発揮できる集団参加の効果としてうまくいっている事例だと思っております。2つ目です。新居浜ローズでは、専門家が入っているLINEグループとメンバーだけのLINEグループ、そして私個人とのLINE、この3パターンを使い分けることができるようになっていきます。全てに属して全体を見ることができるのは私だけなんですけれども、ほとんどの子が、報告や相談内容によってグループの使い分けができていくということが分かりました。これは非常に重要で、これまで比較的受け身的な日常場面が非常に多いローズのメンバーが、自分の意思決定で相談相手を選択できているということの意味しています。日常生活においての重要なスキルの獲得ができていくと嬉しく感じている事例の1つです。3つ目がグループ活動において、前は素直に自分の意見や感想が言えていたのに、今回はそれができていないということがありました。一見、話を聞いて「特に困ったことはない。大丈夫です。」と返事が返ってきたら、そのままその言葉を鵜呑みにしそうになりがちですが、前日まで対人関係で悩みをL I

| | |
|----|--|
| | <p>NEで相談されていたこともあって、前回と今回の活動で何が違うのかなということを考えた結果、人数設定に問題があったことに気が付きました。協働活動において、その人の許容範囲人数を超えていると「大丈夫です。問題ないです。」モードに変わってしまう傾向の人が、5人のうち2～3人見られたことから注意が必要で、少人数であっても活動人数や親密度にも配慮していかなければいけないという課題が見つかりました。この事例に関しては、少し落ち着いて考えてみると、日常的で非常によく見られる事例だなと私は感じています。以上、LINEグループを導入したことによって少ない労力で大きな効果を上げた2事例と、協働活動においてその人個人の許容範囲人数を超えると「大丈夫です。」モードに切り替わってしまうという事例をご紹介させていただきました。</p> |
| 委員 | <p>県立新居浜病院の小児科です。新居浜病院はいわゆる急性期病院で、患者さんの入れ替わりが非常に激しいため、ICTを活用した学習や協働的な学びというのは病院の中ではなかなか難しい状況です。もしかしたら大学病院のように長期入院に及ぶ院内学級を用意しているような病院であれば、ICTの活用ということもあるのかもしれませんが、私は直接的な情報はございません。また、学習ではないのですが、入院中の患者さんで、たまたまタイミングが誕生日だったり卒園式だったりという時に、WEBで一緒に参加するような手配をしていいか相談されたことがあり、それはぜひ参加していただき、誕生日もお祝いしてもらったらいいんじゃないかということはありません。あとは病院とは離れるのですが、私には高校生のお子さんがおられて、一人に一台タブレットが支給されています。タブレットで勉強したものを添付して送ったり、効果的な使用方法を模索しているところだとは思いますが、タブレットで自由にYouTubeを見ていることもあります。なので、部屋に一人でこもっていたら、正直何をしているのか分からないと感ずることがあります。</p> |
| 委員 | <p>新居浜特別支援学校です。生徒たちのICTを使った授業は当たり前ところで、電子黒板を使って子どもたちが休み時間に絵を描いたり、本当に上手に子どもたちがよく使いこなしているような状況です。授業で一番多い使い方は、やり方や手順を示したりすることです。特に映像を用いた手順は、児童生徒の実態に合わせて、映像が良い場合と、紙で一通り全部が出ている方が良い場合と一人一人違うので、そういった一人一人に合わせた手順書を作り、映像であれば家庭科の波縫いであるとか、体育のストレッチの仕方であるとか、いろいろとこういうところに気をつけましょうという場面で使っています。良い点は、映像を撮って振り返りに使えるということだと思います。自分がどうだったのか、</p> |

他の子どもたちがどうだったのか、お互いにそれを評価し合うことに、良い形で使われていると感じます。やっているつもりでもできていないということはあるので、自己評価に映像を伴って、それについての意見を Google Forms を使ってアンケート形式で選べるとか、文字が理解できにくい子には絵を使ってどうだったかを絵で選べるという形でそれを集約したりすることにも使えています。前回にも少し話しましたが、事前に準備ができるという点で、ICT を個々に応じた個別最適な学びという形で使えているのではないかと思います。次に協働的な学びについて、今回は2点のICTを使った協働的な学びの例を話させていただきます。中学部であれば、校外学習に新居浜駅周辺の路線バスに乗って職業探検に行きます。キャリア教育と合わせてやっており、地図作りを行います。そこで仕事の内容ややりがい等をタブレットを持って行ってインタビューします。映像を最終的に発表に使う子もいれば、文字にする場合もあるのですが、実際に自分たちがそれをまとめます。例えばスライドショーのような形でプレゼンテーションのスライドを2～3枚作って、それをQRコードに読み込みます。QRコードに読み込む作業は、先生も一緒に手伝います。QRコードを全部の地図上に貼っていくことで、子どもたちは前の黒板に貼った地図のところにタブレットを持って行って、QRコードにかざして読むと、「誰それです。〇〇に行ってきました。こういう話を聞きました。こういうところがいいなと思いました。」というような内容がいつでも見て、聞けて、他のクラスの生徒も廊下に貼り出すことで見ることができます。これは協働的な学びと言えるか、ちょっと自信はないのですが、共有ができるという意味ではそういったやり方もあると感じました。それぞれの子どもたちの実態に合わせたやり方を模索して、それをみんなで共有したいという願いから、このような実践をしてみました。2点目は、中学部で音楽づくりという学びがあります。音楽の時間に自分たちでミュージックを作ろうと、中学3年生が思い出ソングをみんなで作詞作曲することを目標としています。まず最初は歌詞を考えるところからです。3年間の修学旅行であったり、運動会であったり、いろいろな写真や映像をみんなで振り返った後、思いつく言葉や気持ちを言葉で示せる子たちはクラスルームの中に Google Jamboard という黒板のようなものにそれぞれが書いたら、みんなの書いたものが集約されて映ってくるというようなものがあります。絵を描いてもいいし、そこに何かイラストをどこかから取り込んできて、嬉しかったというようなイラストにする。集約したものを選んでいって、イラストや文字を最終的にはつなぎ合わせて歌詞を作ります。その歌詞ができた次は旋律を作るという工程になります。旋律を制作するのは、ChromeMusicLab というアプリがあり、そこに SongMaker というアプリがあるそうです。コード進行は先に先生が設定しておくことで、それに合う旋律を子ども

| | |
|----|---|
| | <p>もたちが即興的に作るということをやっておりました。一人一人作り、それを発表して誰のがいいかを、みんなで投票しています。いろいろなものが組み合わせられており、音程も上に行ったり下に行ったりいろいろですが、最終的にでき上がった曲をみんなが歌って発表しておりました。3年間の最後の形として、卒業式でそれが歌えるというのは、本当に思い出になると思いますし、みんなでそれができるという楽しい、嬉しいという学びが、協働的な学びなのかなと思います。一人ではできないことが、みんなと一緒にあればできるという嬉しさがあると感じました。子どもたちの創意工夫、先生たちが子どもたちの実態に合わせてできること、そしてワクワクする内容、取り組みたいと思えるもの、取り組めること、もう少し頑張ったらできるかなと思うようなこと、音楽を作るなんて無理と思うところを、それならできるのかなと可能にしてくれるのがICTの凄さだと思います。色や線をつけても音楽になるアプリがあるそうなので、いろいろやってみたいなと思うようなことがありました。</p> |
| 委員 | <p>支援学校は毎日タブレットを持ち帰りされているのですか？</p> |
| 委員 | <p>タブレットを家に持って帰っている子はいません。実際はこちらの方で預かって、必要な時に学校の中で一緒に使っています。校外学習等に行く時には持って行っています。</p> |
| 委員 | <p>ありがとうございます。</p> <p>皆さまのたくさんのご意見をいただくと、子どもの活用場面、保護者の活用場面という、タブレットを使用する対象者や、家庭や学校といったタブレットを使う場所の違いのご意見がありました。もう少し詳しく聞いてみたいと思うところがあったらご質問いただけますか。</p> <p>私は小学校に勤務しております。小学校のことを少しだけ付け加えさせていただきます。確かに先ほどお二人が言われたように、「家に持って帰って子どもが何しているのかわからない。」「重たいのに何で持って帰らせるんですか」という意見は、本当にたくさんあります。文科省が最初に全てのお子さんに同じ学びの場をとということで導入し、新居浜市も一気に進んだのですが、やはり学校でもモラルについてはずっと課題です。情報のモラルをどのように子どもたちに身に付けてもらうか、それと同時進行で、先ほど特別支援学校の委員が言われたように、学習の中でいかに有効的に活用するかというところを、先生たちが頑張っているという状況です。小学校では、例としては、1年生の音読の宿題をタブレットで録って送って、先生がそれを聞いたり、6年生は日記をタブレットで書くなど、今時のお子さんですので、鉛筆で書くよりタブレット</p> |

| | |
|--------|---|
| | <p>上の方がたくさん書いてきますと担任が言っていました。それに対して、担任は子どもに「自分たちはたくさん書くのに、先生たちのコメントは1行ですか」と言われたそうです。その担任はちゃんと生徒の思いに応えるようにタブレットで書くようにしましたと言っていました。あとは協働的ということで、国語でも算数でも、とにかく自分の考えをみんなで共有し合うという場面で使っています。そして、一つのものにまとめたり等、いろいろ工夫を先生たちはしています。家庭学習では宿題のプリントをタブレットで出すということを試み始めていますが、家に帰ってからは保護者のモラルが使い方に関係してくるので、そこはお願いするしかないのが学校の状況です。学校では、ルールは決めて、それを見えるところに貼っておきましょうということをやっており、小学校も中学校も保護者と一緒を進めていっているというところなんです。次に事務局をお願いします。</p> |
| 事務局 | <p>事務局の立場というわけではないですが、今日ある学校に行った際に、先程東予子ども・女性支援センターからもあがった遠隔で実施している授業がありました。欠席している生徒が Google Meet で繋がっていて、授業の様子や黒板を欠席している子どもに配信していて、生徒は顔半分が映った状態で家からつながっていて、その子がボソツと言っていることもみんなに聞こえていました。本当に違和感なく一緒に授業をしており、そういったものがどんどん実施できたら良いと思います。初めの紹介事例にあった LINE グループについても、中学校で支援会議をしていると、緘黙の生徒がすごく多く、先日の学校支援員の会議でも緘黙の問題が出ました。筆談で伝えるということも大事なかなと思います。中学校の立場としては、どうしても生徒指導面が出てきて、タブレットの持ち帰りや LINE についても、否定的に捉えがちになるのですが、前に向かって進んでいかないと普及はしないし、どんなに防御してもよろしくないサイトへの抜ける道はあるので、積極的に活用しながら、モラルについては小さい頃から伝えつつ、活用していかないといけないと感じました。</p> |
| 委員 | <p>ありがとうございました。では、それぞれご意見いただきましたところで、アドバイザーの先生方からご意見、ご助言をいただきたいと思います。アドバイザーの先生、お願いいたします。</p> |
| アドバイザー | <p>各委員の皆様からの情報提供を聞いていて、思いの外、活用が進んでおり、すばらしいなと思います。ただ一方で聞いていて、ICTだけの問題なのかというところだと思います。皆様からの報告を聞いてみると、例えば暴力的なコンテンツの視聴をしてしまうことは、ICTの強みでもあり、問題点でもありま</p> |

す。言葉の力が弱い子どもであっても、視覚的に非常に訴えるイメージしやすい強みに使えば、特別支援学校がされているような、障がいの重い子どもであっても、お互いが共通のイメージを持って学習に取り組めるというすごいプラスになります。一方で、暴力的なコンテンツ、暴力の目撃というのは心理的虐待、暴力の目撃も後頭葉が萎縮します。乖離を誘発しやすいとも言われていますので、皆さんからの報告を聞いていると、弱みの問題点の部分は、ICTに限らずもっと広く受け止める必要があると思います。例えば、暴力的コンテンツはICTだけではなくても、激しい夫婦喧嘩を子どもが目撃するという方が、場合によっては、より悪影響かもしれないです。ICTだからという話ではなく、私たちは、今の時代におけるいろんなツールも含めた子どもの発達にとって重要なものと問題があるもの、この区別をしっかりとつけるということが一つのポイントなんだと思います。ICTの利点はいろいろ出ていて、時間を超えることができる、場所を超えることができる、共通のイメージを持つことができること。一方で、言葉でつながることの難しさの部分はどうするのか。社会性の発達という観点からすると、視覚だけではなく言語の問題です。ただ、これもICTで解決できるところもあります。言語とは違いますが、特別支援学校で紹介されていた音楽というのは社会性とかなり関連がある、感情的なコミュニケーションです。共感等そういったところにリズムというものがあり、ICTを使うからこそできるという部分もあると思います。ちなみに最近、大学の授業で宿題を出す際に、宿題をチャットGPTに解かせることをやっています。そうするとチャットGPTは大体残念な宿題をしてきます。最近、大学教員は宿題をチャットGPTに解かせ、学生がチャットGPTで宿題をやったかどうかをチェックしています。そこで話題になっていたのが、チャットGPTの答えは、よくわかっていない学生が、無理やり書いたレポートみたいになることです。報告を聞きながら思ったことは、学校の先生はもっと子どもたちにチャットGPTを使って作文をさせてみて、チャットGPTが作った作文にみんなでケチをつけるということをして欲しいと思います。いくらチャットGPTに書かせたところで、例えば遠足であれば、実際に遠足の現場に行っていない人には書けないことがあるよね、という使い方までできる時代だと思います。今、民間企業ではAIを使いこなせない経営者は通用しないとわれわれ始めてきています。そういう点で、新しい時代に必要となる資質能力という観点からも、ICTをもっと子どもたち自身が、いかに積極的に、より良く使いこなしていくか、その問題なのだろうと思います。一方で、やはり限界はあって、現状では感覚のモードで言うと、ICTは視覚や聴覚に限られています。嗅覚は最近テクノロジーが出てきているみたいですが、まだ一般では使えないため、視覚、聴覚以外の嗅覚や触覚、味覚の感覚をいか

に子どもたちに育てるかという観点を考えると、ICTの限界というのはいくらでもあるわけです。視覚、聴覚以外の学びというものをどのように充実させるのかを学校の先生が考えていくことが、子どもたちに学校に来てもらうということにつながってくるところです。特に幼児教育分野においては、体の感覚の発達というのはすごく大事になってくるので、今は幼児教育分野でもICTを使うことについては、いろいろな取り組みがされています。一方で、視聴覚以外の感覚をいかに育てて、五感含めた全ての感覚を統合して物事を考える力を育むためには、ICTでは無理だということを、どのように子どもと見つけるのかだと思います。あとICTに関して言うと、ICTも結局は学び方のダイバーシティの選択肢の一つに過ぎないです。不登校の子どもだったり、病気の子だったり、彼らに学ぶ機会を補償するという意味で、ダイバーシティの補償は重要になってきます。持ち帰りの問題に関しても、結局、家庭で持ち帰ったICT機器をどう使うかということの合意形成を、子どもとすることだと思います。ICT機器に限らず、どうしてもいろんな問題が起きてくると、問題を起こさないことばかりが考えられています。それよりも、何のために持って帰ってもらうのかという目的を明確化するということが重要だと思います。なので、家庭で持ち帰った機器をどのように使うかについての課題を、子どもに与え、そこから子どもと考える必要があると思います。先程、生徒指導ということも出ていましたが、今回の改定生徒指導提要で重要視されているのは子どもの権利で、特に参加する権利、意見表明権です。その問題はかなり大きく、例えば校則のあり方について、ルールは大人が押し付けるものじゃなくて、子どもたち自身が作っていくもので、それが民主国家、法治国家を生きる国民を育てるという教育です。生徒指導の観点からも、ICT機器をより良く、お互いのために使うにはどうしたらいいかを大人が考えて一方的に押し付けるのではなく、子どもたち自身が考えるということが大事だと思いました。家庭でいろいろとICT機器の使い方の問題が出てきていますが、親はどうなのか。よく考えてみると、ICTに限らず、それこそ小さい子どもから関係するのが食事の好き嫌いです。親は大体嫌いなものを食べないくせに、なんで子どもに食べろと言うのか。それがICT機器になると、新しいというだけで特別大きな問題に見えてしまっている。昔から同じで、家庭で起きる問題は、親と子どもの上下関係、支配関係の問題が根っこにあると思います。ですので、家庭で子どもにどういう風にしつけをするのかというのは、実はこれは大人の問題になるのではないかということを押さえる必要があると思います。一方で、学校はそこまで介入する権限があるのかという問題でもあると思います。あくまでも学校としてはICTも含め、宿題を家に持ち帰らせることの目的や意味を子ども自身にもしっかりと理解してもらい、保護者にも理解して協力してもら

| | |
|--------|--|
| | <p>う、まずそこだと思います。あとは、子どもが学校に来ているということを通しての社会教育の側面です。保護者に対する理解啓発の点で、暴力的なコンテンツは脳の発達に悪影響を与えるというような正しい知識を提供していくことです。世界のネットリテラシーの問題で、情報は玉石混淆であり訳が分からないものがたくさんあります。その時に大人が読み分けていく力や答えを持っているかという、持っていないですね。まず大人が答えを持っているという思い込みから、お互いが脱却するという必要性があると思います。そういう点で、学校で子どもと一緒にどういう在り方が必要なのかということ、ICTのことであればICTについて一緒に考え、そこで考えたことを家庭でも一緒に考えてみてもらえますかという連携の在り方を学校は求められていると思います。依存の問題については、結局は居場所と目的・目標がない人は依存症のリスクが高くなります。これはゲーム依存の問題に限らず、不登校も含め、いろいろな私たちの社会で起きている問題を大きく見ていくと、基本居場所の無さと目的・目標の無さ、この二つに還元されていると思います。なので、なぜゲームに依存せざるを得ないのか、なぜゲームが依存じゃなくて依存症になってしまうのか。この依存と依存症の違いがすごく重要です。肢体不自由の小児科医の熊谷晋一郎さんという方がいらっしゃいますけど、彼が言っているのは自立というのは依存先を増やすことだと言っていて、非常に深い言葉だと思います。そこに私が一言付け加えるとすれば、自分の責任で依存先を増やす、それが自立ではないかな。そのことを子どもに押し付けるのではなく、一緒に考えることではないかなという風に、皆さんのお話を聞いて思いました。あと、最後に一つ付け加えると、特に小さい子どもにスマホばかりを見せており、それをやっていないと親自身がすごく困ってしまう問題がたくさんあります。例えば、落ち着きのない子が走り回れば世間の目は厳しいわけですね。親自身が理解されていない、支えがない中で、頑張って育てようという時に、スマホでも見せていないとうまくやり過ごすことができない。この点に実はかなり大きな社会的な問題の断片が現れています。そういったところから一緒に考えていく必要がある問題だと思いました。少し長々と言いましたが、まずICTのすばらしい良い使い方や実践が、それぞれのところでできているということ、それがとても良いことだと思いますので、ぜひそれを子どもたちと一緒に振り返って、さらに良い使い方を子どもたちと考えていただきたいなと思いました。以上です。</p> |
| 委員 | ありがとうございます。お願い致します。 |
| アドバイザー | お手元の資料の27ページ、「発表や話し合い」の資料です。巡回相談で学校 |

を回った時に、遠足の行事等を絵日記に描いて後ろに掲示していることがあります。一つの画面のどこらへんに何を描いているのか、全体の使い方や、人物をどの程度描けるようになってきているのか、心の問題ではどんな色使いをしているのか等、掲示物が子ども理解の情報になっていました。しかし、それが今はタブレットで撮った写真になっています。なので、今までは文字が行間からはみ出していたり、文字の大きさがバラバラになっていたり等、その辺りからいろいろな子どものしんどさを掴み取っていましたが、それができなくなる傾向があるので、私は情報を集めることに苦労しています。ですので、学校の先生はICT化をどう捉えて、子どもの日々の気持ちの揺れ等をどのように掴んでいるのかが気になっています。また、休み時間にはタブレットを離していますが、授業中になったらタブレットを離さない。そのときに取り上げていいかどうかという相談がありました。その子どもをよく見ていると、タブレットでコードの学習をしていました。先生の質問には手を挙げてちゃんと答えており、授業には参加しているけれど、持て余す時間をタブレットで授業に関連する勉強をしようとしている様子でした。ギフテッドと優等生はイコールではないですが、賢い子が教室の中で過ごす方法として、それはすごい良いことだというコメントがなかなか伝わりません。みんなが一斉でなければいけない、あの子がタブレットを持っていたらあの子まで持ってしまうという考えのところに課題があると思います。

6年生の家庭科の授業では、調理の時にそれぞれの家庭から何を持って来るかを相談するために、各班ごとに机と椅子を移動して集まっていました。班ごとに集まると、タブレットで何を持って来るかの相談をし、持ってくるものが決まると黒板に何を持って来るかを書いていました。そんなことをしなくても、そこに集まって、話して、黒板に書けばいいだけであって、そこでタブレットを使っているあたりが、効率良く使えていない学校の現状ではないかと思えます。

小学校低学年の8～9割は先生の指示に従ってタブレットを使い、高学年は自分の好きな学習方法でやったらいいと言うと、2～3割の生徒しかタブレットを使わなかったという統計もあります。各生徒がその状況に応じてどう活用するのかを見ながら、発表や話し合いのやり方を考えないといけないと思えます。

次の28ページの協働学習の意見整理ですが、自分の気持ちをタブレットで発表したり、パワーポイントで伝えたりはできるけれど、話し合いをすることができないというものです。資料の下の方に書いていますが、普段からグループでの話し合いができるように指導しているかどうか、意見を比較させて共通点や相違点を元に話し合っているか、話し合いのルールを確認してから協議をさせてい

るか。資料に記載している4つぐらいの事柄ができた上であれば、タブレットを使ってもいいと思います。上手に使いこなす先生の場合は、先程の家庭科の事例においても、席を移動せずに、それぞれの席で、タブレットをグループ同士でつないで、何を持ってくるかをタブレットで相談する。こういった使用方法だといいですよね。そして、話合いで間違っていたら修正するということもできたら良いと思います。しかし、自分が作った作品を修正することは、今の学校文化では難しいです。現状は、間違ったら消す、きれいに消していなかったら先生がきれいに消してしまっています。なので、書く前にすでに消しゴムを握っている子も結構います。書いたのはその時に思いついたことを書いたものであって、否定する必要はありません。また、子どもの作品には先生が横に赤で付け足していきます。大江健三郎さんの原稿を見ると、最初に書いたものの横に次は書いて、スペースがなかったら違う紙に書いて貼っていたりします。こうすることで、最初はこう考えて、次にこう考えたという自分の考えの変化が、そのノートを見たら、この時こう考えてたんだなと振り返りができるようになっています。その学習が、今は消しゴムで消す、正しくなければダメとなっています。これは子どもに自己肯定感がない原因でもあると思うので、消しゴム文化をどう乗り越えるかを考える必要があります。タブレットは、上書きしたら前の分が消えてなくなりますよね。紙だったら横に書いたら、最初も2回目も残ります。前に書いたものが残るタブレットも開発してくれたらいいなと思います。電子教科書についても、ペーパー紙の教科書であれば、めくって両方2つのページを見比べることができるけれど、タブレットの場合は画面が1つのため、別の画面にすると見たい画面が消えてなくなります。複数の画面を見比べることができるタブレットがあると良いと、学校現場で指導している様子を見て感じることです。

次に資料の中に、最近2週間ぐらいの新聞の記事を出しています。10月17日に不登校・いじめ緊急対策パッケージが出ました。ご存知のように不登校が30万人という報告が出た後の緊急パッケージです。資料を見てもらうと、それぞれアプリを使って、不登校の児童へ個別の関わりや指導ができるようになっています。しかし、不登校の子同士がそこで話合いをして、自分の考えを主張して、意見交換をして、自分の考えをどうするか、事柄についてのやりとりはできるけれど、気持ちレベルの共有をタブレットでできるのかは現場の課題です。いじめの問題についても、気持ちレベルのものをどのようにタブレットの通信で伝え合うことができるかだと思います。

次に、資料の下の記事は5歳児健診です。1歳半、3歳の健診に合わせて、5歳児健診も補助を出すことを検討しています。1歳半、3歳に比べて、5歳児は集団参加ができているかどうかを確認します。集団参加ができているかどうか

かを1歳半や3歳児健診のように個別の面接だけで見るのはできないのではないかなと思うので、そこら辺をどう乗り越えるのかが気になります。

2枚目の資料は昨日の愛媛新聞です。「食習慣 脳発達に影響」という記事です。腸内細菌を入れ替えることによって鬱が落ち着いたり、自閉症の子どもについても、腸内細菌を入れ替えることによって46%ぐらい自閉傾向のチェックが減ったという報告文が出たりしています。やはり早寝早起き朝ごはん、体調を整えることが大事であることを、こういう形で明和政子さんのグループが発表したというものです。今、自律神経が弱まり、免疫が下がっているため、インフルエンザやコロナが流行っていますが、食習慣や体調を整えることは、感染症だけでなく、感情のコントロールとも影響があるという記事です。

下が今日の新聞の記事です。2011年から継続的に10万人を追いかけているニコチル調査です。1歳半ぐらいまでにテレビやいろいろなものを見せていると、コミュニケーション力が弱くなり、2～3歳では運動の能力が弱いと書かれています。今まで2～3歳以上の報告がありましたが、1歳半レベルでコミュニケーション力が弱いという報告は初めてです。これがゲーム障害等いろいろなものに重なってきます。小学校低学年の小さい子どものゲームに関わる治療はすごく難しいです。中学高校生ぐらいになったら認知行動療法等をやっていきますが、小学校に入るまでにスマホやタブレットの使い方をどうすればいいか教えていないと、学校に入ってから依存している生活をしている子どもたちの治療は難しいという課題があります。就学前は、保育所や認定こども園、幼稚園によって、タブレットを活発に使うところと、全くタブレットはなしで自然の中で遊ぶところ等、いろいろな育て方をして1年生として入学してきます。いろんな1年生がいるので、タブレットを持つとすぐに使いこなす子と、これ何？スイッチはどこ？から始める子とバラバラであり、それを一つのルールでやるのは難しいというのが今の現状です。その中で、先ほど報告があったようないろいろなやり方ができるのかなと思います。ゲーム障害は、ゲームする時間を減らしますが、減らした時間を子どもは「自分は何をすればいいの？」となるので、ゲーム以外の楽しみを増やすこと。ゲームをしていない楽しみが増えてくると、結果的にゲームの時間が減る。ゼロにすることはできないので、減らしたルールの中でゲームを行なうというのが治療方針だそうです。その辺りで幼児から環境の問題、家庭の問題、いろいろなことをひっくるめて総合的に考えていかないといけないと思います。学校に入る前の先程の1歳半、3歳、5歳児健診も含めて、会議等で意見交換し、共通理解のもとで子どもたちを育てていかないと、預かったクラスで気になる子がいても対応できないと思います。なので、今日みたいな会議はすごく大事だと思っています。以上です。

| | |
|--------|---|
| 委員 | <p>お二人の先生方、ご意見ご助言をありがとうございました。それぞれの立場、またそれぞれのご家庭、それから子どもたちのために、このICTに向き合っていきたいと思います。それでは議題2「その他」に移らせていただきます。何かこの場でお知らせしておきたいことはございませんか。</p> |
| アドバイザー | <p>はじめの各委員の報告にあったように、話し合いはグループで2～3人だったらいいけれど、4～5人になると難しいというのは、学校でもあります。ペアで相談するときには、片方の子が20%だったら、80%の子とペアにすると、100%になるためうまく相談できます。3人の場合、両方に合わせないといけないため難しく、自分の主張を変更しないと合意形成できません。4人になると、2対2の2つの合わせになってしまいます。5人になると完全にアウトです。小学校だけでなく、中学校でも5～6人で相談しましょうと言うと、相談になっていません。賢い子が「はい、あなた言って」と順番に当てていき、みんなが言った意見と関係なしに自分の意見をまとめて発表する、というのが中学校の話し合いの状況です。いかに話し合いをするのが難しいかという点で、ぜひ卒業した大きい子どもも含め、相談の中で自分の考えを変更しながら、みんなと適応行動を取ることをしていただきたいです。これはソーシャルスキルであり、30～40歳になってもトレーニングしないとできない大きい課題と思っています。</p> |
| 委員 | <p>ありがとうございます。他に付け足し等や紹介はありませんか。 本日の協議題を以上で終わらせていただきます。 こういう場でそれぞれの立場のご意見をいただき、自分ができることに取り組んでいけたらと思います。それでは、本日の協議会を終了させていただきます。 皆様のご協力により、円滑な進行ができましたことにお礼を申し上げます。次回は、令和6年2月9日（金）の開催予定でございますので、よろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。</p> |